

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	きたじま よしかず	所属・職名
	北島 義和	京都大学大学院文学研究科社会学専修 博士後期課程
発表題名 (英語)	In Between the Private and the Public - Countryside Access in Ireland	
著者名	Yoshikazu KITAJIMA	
会議名 (英語)	XXIV EUROPEAN CONGRESS FOR RURAL SOCIOLOGY “Inequality and Diversity in European Rural Areas”	
開催地(国、市)	Chania, Crete, Greece	
参加期間	2011年8月22日 ~ 8月25日	
<p>本大会は、主にヨーロッパを研究対象とする農村社会学者が一堂に会する最大の機会として、隔年で開催されている。テーマの関係上、参加者はヨーロッパからの研究者がほとんどであったが、中には南米やイスラエル、また北島以外にも日本からの参加者も見受けられた。また、社会学者以外にも経済学者や行政関係者など、参加者のバックグラウンドは多彩であった。今大会では、4日間にわたる開催期間の間、各人が28のワーキンググループに分かれ、そこで発表および活発な議論が行われた。北島はそのうち、“Trust and Social Capital in Rural Communities: New Forms of Social Cohesion and Frangmentization” と題されたワーキンググループで、4日目に発表をおこなった。</p> <p>北島の発表は、アイルランドでの調査に基づいた、農地における公衆のレクリエーション、特にウォーキングをめぐる、ウォーカーと農民の対立についてであった。アイルランドでは、経済発展とともに一般公衆が農村に赴いてウォーキングをおこなうことが増え、そのようなウォーカーの振る舞いと現地農民の私有財産権との間に衝突が起きている。本発表では、アイルランドの国レベルでの、公衆アクセスをめぐる制度や意見対立を概説した後、このような対立が先鋭化した丘陵地域を事例として取り上げ、そこにおける様々な利害関係者の見解を、ソーシャル・キャピタルおよび信頼の概念を用いて検討した。そこでは、農民がウォーカーに一般的信頼を容易に持ちえないことが問題解決を難しくしており、それに対処するための公的なシステムや、共的關係を中心とした生活世界からの戦略にも、それぞれ限界があることが示された。それとともに、一部の農民の実践から、私有財産から「公共性」へと向かうオルタナティブな回路の可能性についても検討した。</p> <p>この発表に対しフロアからは、地元住民の実践に解決策を見ることは、すべてを自己責任に委ねるネオリベリズムに手を貸すのではないか、あるいは当該社会にある経済的・社会的な格差や不平等を温存することにつながるのではないか、といったコメントがなされた。重要な指摘と受け止め、今後の研究に活かしていきたい。</p>		

### 学会発表渡航支援報告書

ワーキンググループの合間には、ゲストによる全体向けの発表がいくつもおこなわれた。特に、経済危機に揺れる近年のヨーロッパにおいて農村地域が被る様々な不平等・不利益を追及した内容が多く、興味深かった。また3日目にはフィールド・トリップもおこなわれた。北島が参加したコースの中では、現在では経済的に振るわないクレタ島の柑橘類の畑が、政府の補助金のもと、次々と地主によって太陽光発電のソーラーパネルの「畑」へと変えられ、それが景観問題を引き起こしたという現場に、特に興味をひかれた。日本においては原発に代わるものとして期待されている再生可能エネルギーも、経済至上原理の下にやり方を誤れば、このような軋轢を引き起こすことが分かり、北島のもう一つの専門領域である環境社会学的見地からも、非常に有意義な学会参加となった。

